

小池辰雄記念図書室だより

2015.2.20(水)NO.23 千葉市若葉区都賀3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

1. 各地の読書会

今井良が見た『無者キリスト』

今井 良(丹波)

私は、二月十四日土曜日に初めて小池辰雄の「無者キリスト」読書会に参加しました。

今回は、舟板を枕に——湖上のイエス——の所を読みました。

主な内容は、私達がキリストに自分の身を完全に委ねるなら真の平安を得る。そして、霊的現象が神の聖意の発動によって生じるというものでした。

今回の読書会は、前半は水谷先生によるテキスト解説、後半是水谷先生と参加者との問答が行われていました。会場は、日々祈りが積み重ねられている丹波の宿ということもあり、「ピリッ」とした心地よい緊張感を醸し出していました。また、全体的な印象として、皆、「我が身をキリストの内に棄てるにはどうすればよいのか」ということに対して真剣に考えているように感じました。このような雰囲気の中、キリストに全てを委ねる秘訣について学びました。

とりわけ、私が印象に残ったのは、水谷先生と坂口さんとの問答です。坂口さんは、「江戸さんの前でひれ伏した時、自我が砕かれ楽になった」とおっしゃっていました。この時私は、キリストに我が身を委ねるには、キリストの前にひれ伏すしかないということを学びました。

私も、キリストの内に我を完全に委ね切るとどのような変化が生じるのかを体験的に知りたいと思われました。このような充実した学びができてよかったです

2. 小池辰雄を読む会 アンケートから～

(2014年12月13日実施)

○他の集会のように質問用紙を配って先生に伝えて頂きたい。

○いつも土曜日なので、出られない人も多い。

開催時日時の工夫が必要か？

○小池先生の人生経歴などを知りたい。

○学ぶだけで終わらず実践していきたい。

○自分では読み込めないが、先生の読み聞かせ

と解説により神様の御思いが力強く伝わってくる。愛を生きる者でありたい。

○毎回新しい方を中心に感想を聞かれるが、そのやり取りの中で長いクリスチャン生活ではあるが「分かっている気」になってしまっていて、全然分かっていない事に気づかされる。ノンクリスチャンと根底において（自己愛とか自己保身が土台となっている点で）変わらない自分を発見させられる。

○己の能力を向上させたいという思いは時として、エゴに傾きがちとなる。自分は罪深い病気だと神様にいつもあやまっています。

☆その他にも沢山の貴重なご意見を頂きました。今後の参考にさせていただきます。有難うございました。

小池辰雄を読む会

●余市

2015年3月8日(日)13:30～15:00

余市郡余市町豊丘町 370-9 惠泉祈りの家

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:0135-23-9222(木下)

●札幌

2015年3月7日(土)14:00～16:00

(札幌市南区川沿 10 条 3-10-5 札幌祈りの家)

*会費:無料(自由献金)

*連絡先:011-571-2348(三ツ木)

●関西

2015年4月12日(日)14:00～15:30

神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸パイブルハウス

*会費:500円(自由献金あり)

*連絡先:090-4645-7389(後地)

●都賀

2015年2月21日(土)10:00～12:00

2015年3月21日(土)10:00～12:00

千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀プラザ 5 階

*会費:1000円

*連絡先:043-235-3815(石丸)

*準備のため、出席のご連絡をお願いします。

*予習不要・初心者歓迎

図書室だよりは偶数月発行です。

本図書室は献金で運営されています。

凧揚げ

昭和27年は、元旦から小池辰雄が伝道の旅に出たという前回の記述を読んで思い出したことがある。

それはあの正月の日、寒風が吹きすさみガタガタと窓ガラスを揺さぶっている二階の縁側に座って、雲ひとつない晴れた青空高く、凧が小さく上がっているのをいつまでもぼんやり眺めていた記憶である。隙間風が吹き込む戸袋のそばの黒々とした縁側の板の間は、陽があたってぽかぽかと暖かく、その時の至福の気持ちは今でもはっきり思い出すことができる。

毎年正月には、父辰雄が二階のベランダからトタン屋根伝いに集会場の屋根にあがって、「赤龍」凧を揚げてみせるのが行事だった。買ってきた凧の糸目の付け方を男の子の私と弟に教えながら、「角凧は中張りに限る」、「風が強くてもしっかり受けられる」と得意気に腰のくびれのように凧の後ろに糸を張り、新聞紙を切って尾っぽをつけるのももどかしく、父自ら屋根の上にあがっていくのである。屋根の上から凧揚げをしている家など他にないのだが、父は好んで屋根にあがった。

じつは、子どもに教えるというのは口実で、自分が凧揚げをしたかったのだと思う。いい風が吹いてくると、なかなか私たちに凧を渡してくれず、大空はるかに小さく舞い上がってからようやく、「ほら、持ってごらん」と糸を渡してくれるのだが、風が強くなって凧が宙返りを打とうものなら、私たちの手から糸を取り上げ、屋根の棟にまたがって、右に左に糸をゆるめたりたぐったりを繰り返してみせた。

家の前に電柱があるので、その電線に子どもが引っかかないように気を配ってくれているのはわかるのだが、遠くの空によその凧が上がっていると、「あれよりはこっちのほうが高く上がっている」と競争心をむき出しにして、こちらが少し低いと知ると、翌日にはわざわざ糸を買い足しに街に行ったものだ。

だがこの年は父が不在なので、六年生になった私が弟と二人で凧揚げをしても良かったのだが、母が子どもたちだけで屋根瓦に登るのをどうしても許してくれなかったのだから、つまらない正月になったと縁側に座っていたのではないかと思ったのである。

ところが先日こんな古ハガキが出てきた。「順子！ 留守宅はどうかと案じています。七日の朝五時頃、夢の中で信雄と照雄が屋根から落ちて大怪我をした夢を見た。その同時刻に山田奈美さんという人が、二人の男の子が包帯をしているところへ私の

顔が写った夢を見た。これはただならぬ夢とみて打電した。この度の九州路は、実に重大な意味をもたらせつつあります。宇和島丸、船上にて」

辰雄は、夢を見た朝すぐに電報を打つたらしいが、その電報は残っていない。この年の正月に旅先から出したはがきだけが残っていて、元日、東京駅出発、翌二日の正午に九州熊本駅につくとすぐ駅頭で妻・順子宛に、「これから新年の戦いが始まります。それは戦いであると同時に恩恵に浸ることです」と、ハガキを書いた。

その足で熊本の新年集會に臨み、3日、4日と4回、延べ12時間に及ぶ「第二イザヤの本質」という講演と徹夜の祈祷会を果たし、「私はほとんど疲れなし。御霊の力に満ちています」と5日午後、飯塚の集會に向かう車中で家にハガキを送った。6日日曜日午前に集會と結婚式を行ない、午後に福岡で講演、再び飯塚へ戻って泊まったその翌朝夢を見、同時刻に飯塚の山田奈美さんも包帯を巻いた男の子の夢を見た聞き、電報を打ったのである。

1月13日に東京へ戻ってきた辰雄は、「九州に靈的な歌を歌う天才女性がいた」と話したが、私たち兄弟が大怪我をした夢の話はしなかった。しかし、今日、父の出した古いハガキを見ながら、凧揚げに夢中になって屋根から落ちるのではないかと旅の間中祈り続けたであろう父を思った。私の感じていた平穏な、幸せなひとときの記憶がなぜかくも鮮明に残っていたのか。二階の縁側に満ちていたのは冬の日差しだけであったのか。あの時、私は勝手に屋根瓦に登り、転落していたのかもしれないが何ごともなく縁側に座っていた。そんな平凡なひとときを鮮明に記憶していた理由を、この歳になってようやく知ることとなった。

靈的な天才女性は、その年の春上京して、我が家に寄宿することになる。



1952年夏 武蔵野幕屋メンバーと